

誌上ひとりワークショップ

(その5)

～ 家族援助は街のアパレル～

岡田 隆介

広島市子ども療育センター精神科

「さて、今回は問題の仮説はその人なりの枠組の中で組み立てられているという話から、「枠のギリギリ外」というテーマに実習をしました。そのことが、援助者としての自分自身の枠を知り、広げることにもつながる、そういう意図でした。今回は、本児の仮説ストーリーの“承”の部分を手がかりにします。では、Bグループのお二人、前でお願ひできますか？」。

本児役:母は嫌い。けど、憎くいとは思っていない。なんだろ、この違い、先生、わかる？

援助者役:憎いと思うほど、深い気持ちじゃないってことかな？

本児役:その意味もよくわからない。だいたい大人って、自分のことしか考えていない、違う？けどね、わたしは絶対に母みたいな大人にはならない。あんな人生なら、生まれてこない方がマシだと思う！

援助者役:そうかぁ、そこまで思っていたんだ。

本児役:あの人の近くにいるとだんだん似てきそうで怖い。ほんとよ！だから家を出た…。

援助者役:お母さんと離れたら、違う生き方ができる気がしたんだね。

本児役:そう、わかるでしょ？

援助者役:気持ちは分からないくはないけど、でもいま起きているのはそういう単純な話じゃないだろ。

(拍手)

私:まだまだ続く様子だったけど、一応ここまでにしましょう。いかがでした？

本児役:はじめは、親身になって話を聞いてくれる感じで安心感がありました。味方だって気がしました。

私:もしかしたら、家出・同棲も理解してくれるんじゃないかって気がした？

本児役:そうです、そうです。期待しました。

私:それで？

本児役:ところが、しれっと“そういう単純な話じゃない”なんて言われてガックリ。だれも単純だなんて思ってないし、ムカついてやり返そうとしたらストップかけられちゃいました。

援助者役:彼女のゴールのど真ん中に吸い寄せられてしまって、あわててしまいました。

私:わかるな、その感じ！他の方、見ていてどうでしたか？

参加者:母親から離れるだけなら、一時保護所に逃れることもできたはずだけど…。

援助者役:そんなことを考える余裕がありませんでした。

私:どうなの、一時保護について。

本児役:絶対に行かないと思います。母親から離れることは家出理由の半分で、彼のところに行きたいというのが残りの半分だと思うから。

私:援助者の話は彼女からすればだいたい予想の範囲内だったからか、子どもの方は全然揺れている感じがなかったですね。

〔グループでは子ども役が揺れたらしいけど、披露してもらっていいですか？

本児役:母は嫌いだけど、憎いのとはちょっと違う。親なんて、そんなものじゃないかなって思うだけ。でもね、わたしは絶対に母みたいにはなりたくない。だから家を出たの。だって、このまま一緒に住んでいたら、母と同じになる気がするから。

援助者役:嫌いだけど憎いのとは違うって、具体的にどんな気持ちなんだろう？

本児役:うまくいえない…

援助者役:じゃあさあ、お母さんとは違う生き方って、どういうイメージかな？

本児役:え〜と、ちゃんとした家庭をもって…

援助者役:ちゃんとした？

本児役:そんなこと、わかるわけない！

(拍手)

私:子ども役はどんなふう揺れたのですか？

本児役:気持ちを聞かれて驚きました。嫌いだけど憎くないってのを、具体的に言えと言われて、あわてて自分の気持ちを見つめてみました。結局、うまく説明できませんでしたけど。

私:そんなに深く考えて使った言葉じゃなかったのに？

本児役:そうですね、言葉が先行していたところに、あわてて気持ちを追いつかせる感じかな。

私:うまい表現ですね。大事なところだけど、子どもにとっては答えにくい質問だったかもしれないね。本児役にしたら、それくらい自分で考えるよ、あんた専門家だろ！みたいな(笑)。

本児役:そうですよ。その反面、わかってたまるかという思いも…。

援助者役:複雑だったんですね。軽く尋ねたんですけど。

本児役:重いネタを軽く聞くな！

私:いいツッコミですね。で、援助者は母への思いを聞き出せたら、その後は？

援助者役:もちろん共感して、そのあたりをていねいにやっていこうと。

本児役:共感してほしい気持ちは強いです。

援助者役:それで信頼関係を築けたら、Aとのことに踏み込めるかなと。

本児役:そこは透けて見えました。

私:子どもはしたたかで、それほど揺れてなかったような…。

援助者役:ほんと、そうですね。

私:この家出・同棲って、母みたいにならないための本児の解決努力そのものでしょ。援助者として容認はできないけど、ねぎらうのは可能だよな。「すっごく大きな決断だったろうね、誰にも相談できずしんどかったね、迷いもあったと思うけどどうやって振り切ったの？」とか。その後でなら、「離れてみて母と違う生き様という実感はあるの？」とか、「あんまり変わらないなって思うのはどんなところ？」とか、「家を出る前の予想と比べてどう？」とか。それなら、枠ギリギリかな？

本児役:う〜ん、頭が混乱してきました。

私:たとえば、こんなのはどうでしょうか?もう一回、本児役でつきあってもらえますか?

本児役:母は嫌いだけど、憎いのとはちょっと違う。うまく言えないけど、ほら、親なんてその程度のものじゃないですか。

私:キミの友達は、だいたいそんな感じなの?

本児役:そうですよ。親に期待して痛い目にあっただ子はいっぱいいます。

私:哀しい話だなあ…。

本児役:先生、わたしは母みたいにはなりたくない。絶対にイヤ。だから家を出たんです。だって、ほら、このままずっと一緒に住んでいたら、母と同じで嫌な大人になる気がするから…。

私:嫌な大人か、その気持ちは分かる気がする。じゃあ、どのくらい離れるのとちょうどいいと思う?“嫌いだけど憎くはない”にじっくりくるのって何キロくらいの距離かな。

本児役:なに、それ?

私:ちょうどいいイヤさ加減をずっと持ち続けることができ、適度なストレスを味わえる距離だよ。どれくらいだろうね?

本児役:ちょっと先生、ちょうどいい嫌いは加減ってある?適度のストレスって何?意味がわかんないよ、説明して!(拍手)

私:どうもありがとう。あいまいで主観的な心の距離を、言葉じゃなく実際の距離に置き換えようと思ったんです。“誰のところ”じゃなく、“何キロ離れるか”という距離に。

本児役:わけが分からなくなりました、想定外で。

私:聞かれて混乱し、それが疑問に変わり、質問が沸いてくる、となると狙い通りなんだけど。

本児役:はぐらかされた感はありませんけど、「ちょうどいいイヤさ加減」とか「適度なストレス」とかに気持ちを持って行かれました。

私:ノンアルコールビールじゃないんだから、ストレスフリー・憎しみゼロなんてありえない。無い物ねだりなんかせず、自分にとってちょうどいい愛憎やストレスを保てる距離を探そうってことです。なにしろ、彼女が育ったのは極端な世界ですから、あこがれる家族や愛情もまた極端なものでしょ。有るか無いか良いか悪いか、のゼロとイチだけでできている世界観。もっとあいまいで緩くてぬるい話をしたい。そこから、「え?じゃあ、うちみたいなのも家族の一種?」みたいに。

余談ですが、インテリ落語家だった桂枝雀師匠が「緊張から弛緩への落差が大きければ大きいほど杵は揺れる」みたいな話を書いておられました。動物行動学の小林さんも似たようなことを書いてた気がします。

(ウ) 仮説“転”の部分から

では、次に行きます。本児役はまた交代してください。念のために言いますが、わざと外を狙わなくていいです。いつもどおり自然にやってください。本児役からゴールポストの内側だったか、それともギリギリ外だったか、それを聞いて確かめるだけです。Dグループ、お願いします。

本児役:Aといると、どんなことがあっても忘れられる。わたしはAを頼りにしているし、Aだってわたしのことを頼りにしてくれていると思う。信じ合える関係なんて、わたし、初めて。だからAには嫌われたくない。ずっと好きでいたい。

援助者役:なるほど。

本児役:こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もないから。さっきも言ったけど、家族のことはとっくに諦めてる。

援助者役：つまり、家族と違ってAさんを信頼してる。

本児役：そうじゃなくて、信頼しあってる。

援助者役：そうか。そんなふうに関心できる場所があるってことは、とても素晴らしいことだね、けど、キミはまだ15歳じゃない？

本児役：15歳だと信頼関係はつけれないと言うこと？

援助者役：いや、違うんだ。成人が15歳と関係を持つと罰せられるんだよ。もちろん、結婚はできないし。知ってた？

本児役：マジ？うっそー！先生を信じてたからいろいろしゃべったのに、もうなにも話さない！

(拍手)

私：どうでしたか？

援助者役：これだけは言っておかないといけないと思って。

私：確かに大事なことです。本児役の方はどうでしたか？

本児役：完璧に予想通りです。淫行という言葉だって知ってましたから。ただここまでよく話をきいてくれたし、もしかしたら自分サイドで聞いてくれるかな、みたいな淡い期待もありました。やっぱりとまさかが半々くらいでしょうか。だから、裏切られた失望や怒りはそれほど大きな物ではないような気がします。やっぱりなあ、くらい…。

私：確かに、自分以外はあてにしないのが彼女の粹なものね。深手を負わないための仕組みというか…。もう別れざるを得ないというリアリティはもっているの？

本児役：はい、彼は逮捕されていて、もう合わせてもらえないだろうと。でも、実家に戻ることはないという強い意志もあります。

私：そうか、想定内だからこれくらい言われてもびくともしない？

本児役：そうですね。気持ちは揺れても決意は動きません。

私：子どもなりに現実を受け止めていたんだね。Eグループ、やってみますか？じゃあ、どうぞ。

本児役：Aといるといろんなことを忘れられる、Aとはお互いに頼りあえる関係だから。そんなのは初めて。Aには嫌われたくないし、ずっと好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もない。

援助者役：なるほど、Aさんといるとすごく安心できるんだね。Aさんも、まったく同じ気持ちなのかな？

本児役：たぶん、そうだと思う。

援助者役：じゃあキミたち二人は、逮捕とかされることも覚悟の上で安心や信頼を確かめ合っていたの？

本児役：どうだろ、よくわからない。

援助者役：そこがあいまいなら、Aさんの気持ちもあいまいってことじゃないかな？

(拍手)

私：なるほどなあ。本児役の方、いかがですか？

本児役：理詰めで、有無を言わさない感じ。

私：「分かりました」となる可能性は低いにしても、迫力は横から見ていても伝わってきましたが。

本児役：はい、上から視線の真剣さは痛いほど感じました。

私：予定調和的に説得と諦めにまとまっていきそうな、難しい話題ですよ。ちょっとやってみようかな、気が進まないけど。

本児役：Aといるといろんなことを忘れられる、Aとはお互いに頼りあえる関係だから。そんなのは初めて。Aには嫌われたくないし、ずっと好きでいたい。こんな気持ちを家族に抱いたことなんて、ただの一度もがない。

援助者役:キミはAと心でつながっていたんだね?

本児役:そう、わたしにとってAは家族だから。

援助者役:そうかな?家族って、身体の関係をもたなくても安心して一緒にいれるものだよ。心のつながりだけで、頼ったりあてにしあえるのが家族だと思うけど。

本児役:Aだってそうよ。

援助者役:そう?確かめてみた?

本児役:そんなこと、どうやって確かめるわけ?

援助者役:もし男性が性的なつながりだけを求めているなら、それを拒まれたとき、言葉遣いや思いやりの態度がごろっと変わるから。だったらそれは二セモノ、心はつながってなんかいない。身体関係を拒み続けるだけで、家族になれるかどうか確かめられるんだよ。確かな方法だから、しっかり覚えておいてね。

(拍手)

私:はい、ありがとう。ちょっと意識して心理教育的にやろうとしたんだけど、どうだった?

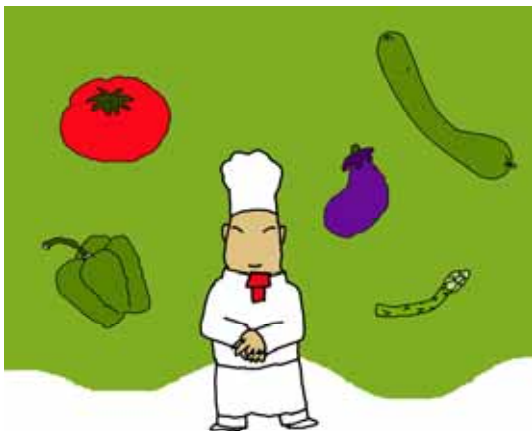
本児役:ど真ん中から説得が始まったという感じではなかったです。試してみる気になってました。

私:そうか。予想外の驚きではなかった?

本児役:心のつながり云々は予想通りでしたが、試し方があるというところは新鮮でした。もしいつか誰かからセックスを迫られる場面があったら、そのときにじわっと効いてくる気がします。

私:そうですか、わたしも参考になりました。

「今回は自分が疲れたので、ここで閉じます。さあ、あと一回です。お互い、頑張りましょう」。



家族援助レシピ

家族の法則 2

岡田隆介 著



このイラストは岡田隆介さんの「家族の法則2」の装丁画を依頼されて作ったもののうち、使用しなかった方のバージョンです。